



## ハッピー・ハロウィーン!

朝の交通指導に立っていると、子供たちが「ハロウィーン集会楽しみです。」と学級で話し合っただけの集会に向けて準備をしている様子を教えてくださいました。10月31日は、ハロウィーンです。私が小さい頃には無かった文化でしたが、今では日本でも新たな文化として根付いているようです。しかし、意外とハロウィーンのルーツを知らない人が多いようです。ハロウィーンは、アイルランド語で「夏の終わり」を意味する古代アイルランド語の「サウイン」が起源です。アイルランドの先住民、古代ケルト人は、11月1日に新年を迎え、前夜の10月31日から、秋の収穫物を集めた盛大なお祭りを開いていました。またこの日には、死後の世界との扉が開き、先祖の霊が戻ってくるとも信じられていました。日本でいえば大晦日、秋祭り、お盆が一度に来るようなものだったのでしょうか。古代の人々は「サウイン」に、死者の魂が蘇って家に帰ってくると信じていました。死者の魂は幽霊や妖精、悪魔の姿をしていて、人々は不気味な仮装をして、この世の者とばれないようにして、身を隠しました。これが今の仮装の元になっています。5世紀にアイルランドにキリスト教が



伝わると、11月1日は、聖人の霊を祭る「諸聖人の祝日 (All Saints' Day)」になりました。古い英語で「Saints」を「Hello」と言ったことから、前日の10月31日が「All Hallow's Eve」となり、次第にHalloweenになったと言われています。

余談ですがディズニー映画に「リメンバー・ミー」というメキシコを舞台とした映画がありますが、「諸聖人の祝日」を迎えた主人公が、先祖を敬うことの尊さを教えてくださいました。私も涙しながら見ました。帯西の掃除の終わりのBGMで「リメンバー・ミー」が流れ、いつもそのことを思い起こします。

さて、ハロウィーンと聞いて真っ先に思い浮かぶ「ジャック・オー・ランタン」「トリック・オア・トリート」の風習も、実はアメリカで確立されたものです。このジャックという男の物語ですが、悪事ばかり働いていたジャックは、生前自分の魂を狙った悪魔と「死んでも、地獄に落とさない」という契約を結びます。ジャックは死後、生前の行いから天国へ行くことができず、悪魔との契約のせいで地獄に行くこともできなくなって、くり抜いたカブの中に火を灯し、今も彷徨い続けていると言います。アイルランドでは、カブを使っていましたが、19世紀半ばにアメリカに渡った移民たちは、手に入りやすいカボチャを使いました。「トリック・オア・トリート」は、1920年代に初めてこの言葉が登場し、徐々にアメリカ全土へと広まります。そして、1950年代になってハロウィーンの風習として定着しました。この「トリック・オア・トリート」は、日本では、あまり定着していないものの、仮装の風習は定着しつつあります。仮装行列はアイルランドからアメリカに移民した人たちが始めたと言われ、日本では1983年に「キディランド原宿店」が企画したパレードが最初と言われています。参加者は100人程度で、外国人が多かったそうです。その後、1997年に東京ディズニーランドがハロウィーン仮装パレードをアトラクションに取り入れるなどして、認知度が急速に高まったと言われています。日本に根付いた文化を正しく知って「ハッピー・ハロウィーン!」と言えば、ハロウィーンの捉え方がまた違ってくると思います。